

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 30 日現在

機関番号：32644
 研究種目：基盤研究(C) (一般)
 研究期間：2012～2015
 課題番号：24520611
 研究課題名(和文) CEF Rに準拠した技能統合型英語テキストの開発と学習者・教師自律支援環境の構築

 研究課題名(英文) Developing a CEFR-informed four-skill-integrated EAP textbook to facilitate autonomous learning and teaching

 研究代表者
 長沼 君主 (Naganuma, Naoyuki)

 東海大学・外国語教育センター・准教授

 研究者番号：20365836

 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的はCEFRに準拠した技能統合型英語教科書を開発することにある。また、学習者・教師自律支援のため、言語ポートフォリオの開発も目的とした。教科書はプロセス志向のタスク設計により学習者自律性を促進し、タスクの足場がけにより自己効力を高めることを意図した。教材はCLILアプローチを用い、認知思考力を高めるように設計された。A2やB1の教科書が典型的には日常的な学習内容であるのに対して、この教科書では下位レベルでもアカデミックな視点のもと身近な社会的問題を扱った。教科書はA2+の学習者がB1やB1+となることを目的とし、言語素材を下げつつも上のレベルの言語機能を保持するように足場設計した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to develop a CEFR-informed four-skill-integrated EAP textbook. We also aim to develop a language portfolio to support learner and teacher autonomy. The textbook intends to promote learner autonomy through a process-oriented task design in which learners can increase their sense of self-efficacy, what they “can do”, with scaffolded tasks. Materials are also informed by the CLIL approach and designed to develop learners’ cognitive or thinking skills. While the learning content aimed at A2 and B1 level is typically less academic and more related to everyday topics, this EAP textbook provide level-appropriate, rich contents on familiar social issues. This textbook includes scaffolding for learners at the A2+ level whose target is to progress to a B1 to B1+ level. The scaffolding is provided by lowering the level of language used in the texts while language functions related to scaled can-do statements stay at the original upper level.

研究分野：言語学習動機づけ、言語テスト論

キーワード：言語教育学 言語ポートフォリオ評価 英語テキスト開発 学習者・教師自律性 ヨーロッパ言語共通参照枠 内容言語統合型学習

1. 研究開始当初の背景

2011年6月に文部科学省より『国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策 英語を学ぶ意欲と使う機会の充実を通じた確かなコミュニケーション能力の育成に向けて』が出され、「生徒に求められる英語力について、その達成状況を把握・検証する」ことが掲げられた。提言では中学・高等学校において学習到達目標をCan-Doリストの形で設定し、パフォーマンス評価等を用いて到達度を把握することが推奨されている。Can-Doリストとは「言語を使って何ができるか」を具体的な行動記述により記した、「ヨーロッパ言語共通参照枠(CEFR)」などで用いられている学習と評価のための到達指標であり、現在、世界的な広まりを見せている。

CEFRの背後には複言語複文化主義や行動中心主義の思想や自律学習や生涯学習といった学習観がある。ヨーロッパにおいては能力発達や学習の指針を示すCEFRと合わせて、「できるようになったこと」を自己評価とともにパフォーマンスの証拠を残す「ヨーロッパ言語ポートフォリオ(ELP)」が用いられている。日本においてもCEFR-Jといった日本の文脈に合わせた能力フレームワークが開発されているが、具体的にCEFRを応用して開発された教材や言語ポートフォリオの利用は少なく、海外出版社による教科書等を見ても既存の教材にCEFRのレベルづけやCan-Doリストによる目標設定をしたものが多い。

2. 研究の目的

本研究ではヨーロッパ言語共通参照枠(CEFR)を日本の高等教育の文脈に合わせて修正・適用した4技能統合型のアカデミック英語テキスト(教科書)を開発することを目的とする。また、学習者・教師自律性を支援するために、実際にテキストを使用するにあたり必要となる、教授資料・自律型教材・言語ポートフォリオ等を開発することも目的とする。

初年度にはCEFRに準拠した英語テキストと授業外の自律学習を支援する付随教材及び学習目標・履歴を管理する言語ポートフォリオの開発に必要な基礎研究として、CEFR準拠テキスト等の分析や教師ニーズ調査・教室実践例収集を行う。次年度には具体的な技能統合型テキスト及び学習者・教師自律型教材の開発を行い、最終年度にはそのパイロット利用に基づく有効性の検証及び改訂を行う。研究指定年度終了後にはテキストを順次出版し、普及を行う。

3. 研究の方法

(1)既存の「CEFR準拠テキスト」の分析：CEFRに準拠した海外出版テキストを分析し、Can-Doリストの取り扱いや各ユニットのタスクなどとの関連の分析を行う。

(2)開発テキストで扱う「言語教授項目」の分析：CEFR準拠テキスト分析に加えて、CEFRのThresholdシリーズの機能・概念リスト、EQUALSのCore Inventoryの文法・語彙・言語表現リスト、English Profileの語彙の語義別レベルや文法の基準特徴リスト、CEFR-Jの教科書コーパスに基づいた語彙リストの分析を行う。

(3)開発テキストで扱う「言語学習タスク」の分析：European Center for Modern LanguagesのCEF-ESTIM Gridのテキスト・タスク記述観点やCEFR-Jの能力記述を参照し、CEFR準拠テキストの学習タスク分析を行う。

(4)CEFR準拠テキストの「教師ニーズ調査」の実施・分析：JALT FLP-SIG(フレームワークと言語ポートフォリオ研究部会)主催のワークショップや学会フォーラム等で、CEFRに準拠した技能統合型テキストに対するニーズ調査分析を行う。

(5)CEFRを用いた「教室実践事例」の収集・分析：同研究部会において、これまで及び新規に収集したCEFRを日本の大学に適用した教室実践事例の分析を行う。

(6)CEFRに準拠した技能統合型「英語テキスト(試作版)」の開発：基礎研究の成果に基づき、B1からB1+へと伸ばすことを主眼としたテキストを開発する。ただし、言語素材レベルを調整することでA2+からのレメディアル学習を可能とするための補助的な工夫も行う。また、アカデミック英語として、下位レベルにおいても身近で社会的なトピックを扱うこととする。

(7)学習者自律性支援のための「自律学習教材・言語ポートフォリオ」の開発：個々の学習者の目標やペースに応じた学習を可能とする、教室での学習を補完する自律学習教材の開発を行う。また、学習目標や履歴を管理するためのCan-Doリストに基づいた言語ポートフォリオの開発も行う。

(8)教師自律性支援のための「教授資料・事例集」の開発：収集した教室事例の分析等に基づき、具体的なテキストの活用法やワークシートを示した教授資料・事例集の開発を行う。

(9)CEFRに準拠した技能統合型「英語テキスト(試作版)」の改善：パイロット利用や教材開発及び利用に関するワークショップ等でのディスカッション等に基づき、テキストの改善の方向性を探り、下位(A2)及び上位(B2)レベルのテキスト開発の検討を行う。

4. 研究成果

初年度にはCEFRに準拠した海外出版テキストを収集し、テキスト本体や付随Can-Doリスト等の分析を行った。また、

CEFR 関連資料に基づいて、CEFR ベースのテキストや課題レベル判定に用いる言語教授項目及び言語学習タスクの分析を行った。これらの分析結果をベースに、全体コンセプトと具体的スペックの検討を行い、JACET の ESP 研究部会と JALT の FLP 研究部会との共催でワークショップを開催し、CEFR ベースの教科書に関する教師ニーズアンケート調査を行った。さらに JALT 年次大会において FLP 研究部会フォーラムを行い、CEFR ベースの教科書に関する議論を行った。その上で A2+ から B1 レベルの教科書の構成案を作成し、サンプルユニットの開発に着手した。ユニットは、内容言語統合型学習 (CLIL) のアプローチを取り入れ、プロジェクト型学習のアプローチによるテーマ的なつながりのあるユニットと組み合わせ、複数のインプットをもとに内容を整理し、深く考え、意見をまとめてアウトプットする機会を設ける構成とした。

次年度には教科書構成の具体的な仕様 (スペック) を確定し、教材開発マニュアルを作成した。そしてマニュアルに基づいて、テーマに基づく一連のサンプルユニット (1 チャプター、3 ユニット) の開発を行った。JALT 年次大会の FLP 研究部会のフォーラムでは、開発したマニュアルやサンプルに基づいた議論を行い、教材開発チームを編成した。その上でミーティングを重ねて、各チャプターの草稿の作成を行った。さらには、言語ポートフォリオによる自律学習支援環境の開発に着手した。CEFR に基づいた実践事例については、別途科研を申請し、主に国内の CEFR 実践事例に関するより包括的な建設的検討を行うこととした。

最終年度には、開発した試行版の教科書をもとに各チャプター開発チームと編集グループとでやり取りを行い、教材改訂作業を行った。各チャプター各ユニットのタスクについて、CEFR の能力記述文を参照したタスクベースの Can-Do リストを開発した。また、A2+, B1, B1+ の基準特性 (criterial features) に基づいて発達段階ごとのモデルエッセイを開発した。さらに、メインテキスト (B1 レベル) について、A2 レベルの平行テキストを作成し、文法及び語彙的な修正プロセスを可視化した対応表を作成した。言語ポートフォリオについても試作版を作成し、教科書の使い方及び資料を掲載した教授マニュアルを作成した。

しかしながら、CEFR 準拠教材の開発において、語彙・文法のチェックなどの面で、当初予定した以上に時間がかかり、開発した教材を実施したケース事例の収集・検討及び学習者・教師自律性を支援するポートフォリオ・システムの構築に時間を割くことができなかったため、研究期間延長申請を行った。延長年度においては、教材に付随してタスクごとに開発された自己評価 Can-Do チェックリストに基づいて、ウェブ上 (Moodle) で作

動するポートフォリオ・システムの構築を行い、試験的に公開した。また、実際に教材を使用したケース事例の検討を行い、足場が機能するかなどで、学習者から期待される肯定的反応が得られることを確認した。

具体的な成果物として開発されたテキストの構成及び特徴は次の通りである。

(1) 内容言語統合型教材：ヨーロッパにおいて CEFR とともに用いられている内容言語統合型学習 (CLIL) アプローチを実現するため、15 のユニット (課) を一貫したテーマを持つ 3 つずつの 5 つのチャプター (章) にまとめ、内容的な深まりを持たせた。各課の本文の他にも授業外学習で様々なリソースを扱い、一つのテーマについての深い内容理解ができるようにテキストの選択を行った。また、下位レベルにおいては、CEFR の能力記述に合わせて、日常的で言語活動内容になりがちであるのに対して、アカデミック英語として身近で社会的な問題を取り上げた。言語機能面でも認知思考レベルにふさわしい、上のレベルの言語機能を扱う一方で、言語素材のレベルを下位レベルに落とすなどの調整を行った。(そのため B1 を A2+, B2 を B1+ などのプラス表記とした)

(2) 技能統合型教材：1 課と 2 課ではインプットの深い内容理解に重きを置き、3 課では協働的学習を通して、インプットの内容を整理・統合し、深いアウトプットへとつなげる学習を行う構成とした。1 課では、チャートを用いてテキストを分析的に読み、口頭で説明するリプロダクションを通して、スピーキングの下地作りを行う。また、授業外に関連内容テキストを自律的に読む課題を設けた。2 課では、講義を分析的に聞き、要約作成し、ライティングの下地作りを行う。また、授業外学習として、複数の関連内容テキストを参照しつつ、文章を編集して書く課題を設けた。3 課では、インプットを統合的に理解して、協働でチャートを用いたプレゼンテーションを作成する。また、授業後に発表内容をもとに、意見を再度まとめて書く課題を設けた。

(3) 思考と言語の足場がけ：本文理解において前提・命題・展開と深い思考を段階的に促す発問とさらに自発的に作問を行う活動を設け、また、1 課と 2 課とで賛否など異なる視点を扱うことで、産出において異なる視点を比較参照できるようにした。さらに本文と関連したリソースを複数掲載し、多角的視点を得られるように工夫した。言語的足場としては、チャート (Graphic Organizer) を用いて、図示された情報が理解・産出でスパイラルに足場となっていくように設計した。批判的読解に基づいた段階的要約作成タスクや本文に埋めこまれた語彙の推測タスクなど、学習方略の学びともなるようにした。また、English Vocabulary Profile に基づいて、語彙的な書き換えやグロッサリー作成を行

うとともに、English Grammar Profile も参照して、下位レベルの平行テキストの作成を行った。聞き取り及び読み上げ音声も速さを変えて録音し、意味的なチャンクに区切ったテキストや音声も掲載・収録した。

(4) 自律的学習と評価：各章はすべて同じタスク構成とし、CEFR の Illustrated Scales を参考にして、各タスクに Can-Do 形式による目標を記載した。章末には自己評価チェックリストを設け、コメントを記述させることで内省を促すようにし、スパイラルに自己効力が高まり、自律的に目標設定をすることが可能にした。また、例えば、1 課の授業外に本文で学んだのと同様にチャートを作成し、2 課の冒頭で発表をしたり、1 課で段階的な発問に回答し、2 課では協働で同様に作問を行ったりするなど、課をまたいだ学びの接続の工夫も行った。また、ライティングは、1 課で一つの視点から書き、2 課で別の視点を付け加え、3 課で他者の意見も踏まえて書きなおすなどプロセスライティングの手法を取り入れた。話すことと書くことの評価に関しては、CEFR の Oral/Written Assessment Criteria Grid を参照し、話すこと(発表)は「運用 (Delivery)」と「構成 (Organization)」書くこと(作文)は「描写 (Description)」と「論述 (Argument)」の観点から、Can-Do 形式の能力記述に基づき、CEFR のレベルを自己評価や他者評価できるようにした。1 課と 2 課の授業外作文課題では、A2+、B1、B1+ レベルのモデルエッセイを掲載し、それぞれのレベルの基準特徴に関するアノテーションも設けることで、作文及び自己評価の際にエッセイを比較して、参照できるようにした。さらには、A2 レベルの平行テキストについても、どのような調整を行ったのか、いくつかの文に関して、ステップを踏んだ書き直しのプロセスを掲載し、言語的気づきを高めるとともに、作文で自分の文を書き直すにあたっての学びが得られるようにした。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

Fergus O'Dwyer, Alexander Imig & Noriko Nagai “Connectedness through a strong form of TBLT, classroom implementation of the CEFR, cyclical learning, and learning-oriented assessment” *Language Learning in Higher Education*, 査読有、3 巻 2 号、2014 年、231-253 ページ

〔学会発表〕(計 4 件)

Naoyuki Naganuma, Noriko Nagai & Fergus O'Dwyer “How to scaffold a CEFR-informed EAP textbook” The 41st Annual JALT International Conference、2015 年 11 月 22 日、静岡県コンベンションアーツセンター

Naoyuki Naganuma, Noriko Nagai & Fergus O'Dwyer “Developing a contextualized

CEFR-informed textbook for Japanese learners of English to facilitate autonomous learning and teaching” AILA World Congress 2014、2014 年 8 月 12 日、The Brisbane Convention & Exhibition Centre, Brisbane, Australia

Fergus O'Dwyer & Naoyuki Naganuma “Language portfolios and the FLP SIG Kaken project” The 38th Annual JALT International Conference、2012 年 10 月 14 日、アクトシティ浜松

Naoyuki Naganuma “Development of Can-do based evaluation/learning tasks to supplement the CEFR” The 10th AsiaTEFL International Conference、2012 年 10 月 5 日、Hotel Leela Kempinski, Delhi, India

〔図書〕(計 2 件)

Fergus O'Dwyer, Morten Hunke, Alexander Imig, Noriko Nagai, Naoyuki Naganuma, & Maria Gabriela Schmidt (Eds.) “Critical Constructive Assessment of CEFR-informed Language Teaching in Japan and Beyond” Cambridge University Press、2016 年、362 ページ

Naoyuki Naganuma, Noriko Nagai, Fergus O'Dwyer (Eds.) “Connections to Thinking in English: The CEFR-informed EAP Textbook Series B1(A2+) to B1” 朝日出版、2015 年、162 ページ

〔その他〕

ホームページ等

FLPSIG; Framework & Language Portfolio SIG established within JALT (<https://sites.google.com/site/flpsig/home>)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

長沼 君主 (NAGANUMA, Naoyuki)

東海大学・外国語教育センター・准教授

研究者番号：20365836

(2) 研究分担者

永井 典子 (NAGAI, Noriko)

茨城大学・人文学部・教授

研究者番号：60261723

ファーガス・オドワイヤー (O'DWYER, Fergus)

大阪大学・世界言語研究センター・講師

研究者番号：70597301

アレクサンダー・イミック (IMIG, Alexander)

中京大学・国際教養学部・准教授

研究者番号：50511143